印象３６編 —2021年１０月の総評に代えて

○林　　桂○

＊投稿数も今までの１．５倍になったが、佳作も多い月だった。今までのほぼ倍の３６編を厳選した。今後も長く印象に留まるような作品にも出会えた。「口語詩句」の作者は、俳句、短歌、詩と表現のベースが異なる集団でもある。その中で、しばらく前から短歌の韻律を基調とする作品の充実ぶりが目に止まるようになっている。今回も同様である。「口語詩句」として読んでいるので、「短歌」として読んでいる訳ではないが、遅れて確認すると、短歌の韻律の作品であることが多い。これは基本的に俳句読みである私の傾向なのか、「短歌」での傾向なのか判断する材料は持ち合わせていない。塚本邦雄は俳句の技法を短歌に持ち込んだとも言われるが、塚本の魅力は俳句読みにも響いた。同じ事がここで起こっているのか、「短歌」の前線がここに表現されているのか、「口語詩句」の表現が実現されているのか、判ずることは難しい。しかし、私の思い描く所謂「短歌」とは、趣が違っている。歌人はどのように読むのだろうか。

●まちりこ●（埼玉県）
万感の思いがくるぶしに宿る

＊足の両側にぽこっと突き出たくるぶし。不思議に思った幼年期を思い出した。万感の溜まる場所か。なるほど。

●青野陽●（熊本県）
昼空の見えない星の尊さよ
君が作ってくれたチャーハン

＊昼間も星は夜と同じように出ている。明るい太陽の光で見えないだけ。見えないのは、それを隠す太陽光の尊さでもある。その明るさの中でのチャーハンのまぶしさが感じられる。それは君のまぶしさでもある。

●松下誠一●（東京都）
心拍が強まるほどの地震でも
収まればまた人を嫌って

＊地震に身構えるとき、地震との関係だけが頭を占めている。収まれば、自分が帰ってくる。帰ってきた自分は相変わらずの人間嫌いである。

●小林奔●（神奈川県）
この人は運命の人と笑う母
ただのオヤジを愛してる母

＊若き日に出会った運命の人も、今はた

だのおじさんにしか見えない。しかし、その幻影は今も母の中に生きていて、愛し続けている。子のシビアな目も、幸せとは何かを分かってのものだろう。

●小林奔●（神奈川県）
父さんのバンドに入りたかったな
そう言って友はサックスを売った

＊父がプロのバンドマンかアマチュアのバンドマンかは解らないが、その影響でサックスをはじめた友。しかし、今父の世界から遠ざかる決心をする。売るとはそのための行為だ。

●藤色●（京都府）
いちばん可愛く唇がうごく単語
話し合ってきゅうりになった

＊写真を撮るために、「チーズ」と言って口角をあげたが、「チー」は良いにしても「ズ」では笑顔にならない。そこであるときから「1＋1は」と聞いて、「2」と答えるように変わった。しかし、これはどちらも静止画のためのものである。「きゅうり」は、動画対応の言葉である。口元を見ながら、いろいろ試している姿が浮かぶ。こんなことを大人はしないだろう。だから貴重だ。

●藤色●（京都府）
友と書くとき
二対一に分かれるはらいの行方

＊「友」のはらいが同じ方向を向いていないことに気づく。それはそのまま「友」関係の難しさを発見することでもある。

●小林奔●（神奈川県）
故郷のハワイは今日も快晴と
フラ習う君岐阜生まれじゃん

＊軽くジョークを言い合える仲なのだろう。神奈川弁とも言われる「じゃん」の砕けたいい方が生きている。

●さいう●（愛知県）
母の背に負われ
蛍に触れた日の
わたしはやわい神様だった

＊生まれたばかりの幼児は神の領域に住んでいるかもしれない。「やわい神様」が言い得て妙。

●青野陽●（熊本県）
教室に馴染めないから
馴染みたくないから
ちゃんと授業聞いてる

＊熱心に授業を聞いているのは、できるだけ他の生徒と交わらない生活をするための選択。沈黙の多数に紛れ込む。確かに物静かな生徒の中に感じられる雰囲気ではある。

●さいう●（愛知県）
眠れないからだを
海として起こす

花の匂いがする夜明け

＊作り込み過ぎると、それがあざとさとなって感動を妨げることがある。この1編も最初そのように感じたが、やはりかっこいい。あざとさを突き抜けた快作だろう。

●加藤美紀●（愛知県）
地下鉄で
どうぞと席を譲られて
空の子宮を抱えて
座った

＊妊婦と間違えて、席を譲ってくれたというのであろう。「空の子宮を抱えて」の表現にユーモアがある。つべこべ言わずに、お言葉に甘える。大人の対応である。

●風船●（東京都）

名前が微かに残るタオル
病院への小旅行を思い出す

＊油性マジックで他の入院患者の洗濯物と間違えないように記名する。それも今は度重なる洗濯で薄くなっている。退院から時間がたっているのだ。今では入院を「小旅行」と言えるまでに。

●猫谷圭希●（広島県）
妹は六時間だけ生きていた
私が寝ている間に死んだ

＊誕生後すぐに亡くなった妹。それは私が眠っている間の出来事。喪失感は父母だけのものではない。私も、姉（兄）になることを心待ちして誕生を待っていたのだから。今もその喪失感は残っている。

●まちりこ●（埼玉県）
虫メガネで蟻を焼いていた、弟も

＊小学校で、太陽光を虫眼鏡で集めて、紙を焼く実験をしたことを思い出した。それを蟻を焼く遊びに変えた。「弟も」だから、兄（姉）の私も同じに遊んだのだ。残酷な遊びだが、今もそれが深く心に残る意味が大きい。

●風船●（東京都）

知りたくなかったことも
言わなきゃよかったことも
小瓶に詰め込んで
眠る

＊心の中の「小瓶」だ。だれも、過去、その一日の人間関係の軋みに苦しみながら、それを胸に納めて生きている。

●長谷川柊香●（宮城県）
アネモネも
嘘も
誠も
さようなら

＊嘘からも、誠からもおさらばしたいという衝動が作者を襲う。しかし、簡単ではない。これに添えられた「アネモネ」が手助けしている。詩的に昇華させることで収めどころを与えてくれている。

●さいう●（愛知県）
寝台に投げた
じぶんの身体へと
ゆっくり夜が染み込んでゆく

＊最終行の「ゆっくり夜が染み込んでゆく」が、回復のための「癒し」。

●豊冨瑞歩●（茨城県）

二年後のあたしも
例えばイタリアで
うまくいってるような気がして

＊塚本邦雄に「日本脱出したし皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係も」がある。ここには脱出願望が描かれているが、脱出先の示唆はない。この1編も脱出願望だが脱出先がある。例示に選んだイタリアの色彩は明るい。「あたし」という一人称は女性。仕事での閉塞感か恋愛での閉塞感か。ともにクリアにする夢のイタリアである。

●松下誠一●（東京都）
ランドセル背負って少女は階段を
液体みたいにくだっていった

＊「液体みたい」という比喩が際立つ。どのような方向にイメージを膨らませてゆけばよいのか戸惑う。この未解決感の前で、なかなか去りがたいで思いになる。

●猫谷圭希●（広島県）
口元を覆う不織布一枚が
私に貼られたラベルみたいだ

＊マスクをせずに外出するには、そうとな勇気がいる時勢である。たしかに、だれもが免罪のラベルを口元に貼っている

ように見えてくる。

●広田土●（大阪府）
秋風に負けて深海魚になった

＊池田澄子の「じゃんけんで負けて蛍に生まれたの」の本歌取りだろうか。澄子の明快性はないが、謎めいた深度は増している。

●さいう●（愛知県）
購買のキャラメルパイを奪い合う
今日がいつかになる日を思う

＊「今日がいつかになる日」を思いながら生きているのだ。残念ながら、私はこんなことを考えもしないで生きてきてしまった。学校購買部一番の商品の購入を争うのは、どこの学校を問わず定番行事化されていることだろう。

●さいう●（愛知県）
技巧とか見栄がいらない
友人と並んで食べる
やわっこいグミ

＊「並んで食べる」は、同じ方向を見てということ。向かい合ってではないところに「友人」関係が表現されている。「やわっこいグミ」は食感のごちそう。それを分

かち合うことができるのも友情のうちにある。

●さいう●（愛知県）
教室の
たった一個の空席が
こんなにぼくを弱くしている

＊「ぼく」の中にある欠席の生徒への特別な思いが、そのまま欠落感となって心を萎えさせる。自分の思いを確認できるのは、こうした欠落感の中でだろう。

●さいう●（愛知県）
すぐ蹴るし殴るしぼくの妹は
ひとりぼっちの怪獣みたい

＊「ひとりぼっち」の怪獣に、兄（姉）の眼差しがある。話は古くなって恐縮だが、ウルトラマンシリーズに現れる怪獣は、多く単体である。単体であることに、時の少年達が感じていた潜在化した思いはこのようなものではなかっかと、今更に思った次第である。

●さいう●（愛知県）
学校にいっぱい
好きな人がいる
いとこの八重歯

まぶしいやえば

＊学校が楽しくてしかたがない小学校低学年くらいのいとこに思える。一行空白後の「まぶしいやえば」は、そうは思えない学校生活である私の思いを切り取るものだろう。

●髙橋ちひろ●（宮城県）
気温を確認して
遅咲きの百日草を
ベランダに出す
みないな暮らしが私の幸せ

＊平凡なとか穏やかなと言ってしまえば終わるような理想の暮らしだが、それを丁寧に具体的な姿に思い描いているところに、大切な意味がある。

●藤ほたる●（神奈川県）
電車で本を広げるとぴぴぴって
差しこむひかり　戦争をしらない

＊「戦争をしらない」が印象的。不意に差し込む光に喚起された突然の思い。どこかに潜在させて日常を生きているということかもしれない。

●藤色●（京都府）
なにが足りなくて烏

＊カラスは黒くて黒目との区別がつかないから、目にあたる一画がないと説明される。しかし、作者は、カラスが鳥として欠けているものがあるための表現だと考え、何が欠けているのかと問う。すると逆に欠けているのは、カラスが他の鳥を超えている存在ゆえの表現にも思えてくる。

●最上葉途●（山口県）
風に揺れる
手づくりのぶらんこ
無人集落の夏は
蝉と、木々のざわめきと。

＊「手づくりのぶらんこ」に子供達の姿と、真摯に子育てに向き合った家族の姿を思い描く。蝉の声と木々のざわめきは、無人化した集落への鎮魂歌のようだ。

●南風●（東京都）
木漏れ日が日向になっていくけど
寒いね

＊陽が射しても暖かくなってゆかない冬の木のもと。「寒いね」はベンチでの会話だろうか。

●まちりこ●（埼玉県）

身を守るために飛ぶ飛魚の
躍動感に似たおはようの声

＊学校での元気な朝のあいさつも、追い詰められての飛魚の飛翔のようなものだという。元気を演じることで、学校生活の自分を守っているのだ。

●広田土●（大阪府）
あの日、わたくしの母は
婚礼蒲団とオリーブを持って
父の家にやってきた

＊「あの日」は、父と母が共に生活をはじめた日。「オリーブを持って」の「オリーブ」は、鉢植えの木だろうか。母は以前の生活の中からオリーブを育てるという一つだけを選択して持ってきたのだ。気っ風がよくて優しい母のようだ。

●合川秋穂●（京都府）
やや焦げたパンにも謝る人だった

＊焼いたパンが少し焦げていても、謝るような人。優しい心遣いと、自信のなさが同居したような人だろうか。「だった」と回想する。どのような理由かは解らないが、関係の途絶えた人でもある。

●小林奔●（神奈川県）

一筋の涙も影には映らない
幹登る水が見えないように

＊三次元を二次元の単色に変換する影には、涙は表現されない。「幹登る水が見えないように」は、命の源の表現が可視化されていないということだろう。「水」は「涙」である。